

# 『言語と文化』 発刊に当たって

国際言語文化センター

所長 黒崎 勇

甲南大学の国際言語文化センターは、1年間の発足準備期間の後、1994年4月に設置されました。しかし、最初の2年間は各学部より選出された委員と外国語担当の教員よりなる委員会によって運営されてきましたが、昨年4月に教授会が作られ学部に基づる組織となりました。文学部より英語、ドイツ語、フランス語担当の教員として各1名が移籍し、英語英米文学科より2名の教員が2年間で限度に出向、さらに新たに英語担当教員3名、中国語担当教員1名、日本語担当教員1名が加わり10名の教授会が成立しました。センターの目的は、日本語も加えて、甲南大学に於ける言語教育を充実させることにあります。従って、教授法の研究と教材の開発がセンター教員に課された一番大きな使命となっています。更に加えて言語文化の教育と研究も目的の一つとなっていますが、これは今後十分に検討を重ねて充実を計らなければならない分野です。

センター教授会の発足と同時に、センター教員による年間1冊の紀要の発行が決められました。センター教員の言語教育および言語文化の研究成果を世に問うものです。

さて、私が属しております日本ドイツ文学会でも、私が入会した当初からドイツ語教育および教授法に関する研究が重ねられてきましたが、この数年来の情勢は当初とは比較にならないほど全く変わって来ました。『教養の外国語』か『実用の外国語』か、と議論していた時代が懐かしくなるような気がします。しかし、あまりにも実用を重視する傾向は英語偏重にかたより、日本の将来の正しい国際化に支障を来すことにもなりかねません。一方、中学や高校で実用を重視する英語教育が充実すれば、数年後には高等教育機関の英語教育にも影響を与える可能性も無いとは言えないでしょう。さらに、メディア改革の時代に入りパソコン等の情報機械の普及・発達はこのからの言語教育・言語習得にますます大きな影響を与えることでしょう。このような情勢の中で、甲南大学の国際言語文化センターが言語教育の研究や言語文化の研究に正面から取り組むことは大きな意義があると思います。日本の大学に於ける言語教育に大いに役立ち、注目される研究結果がこの紀要に数多く発表されることを期待して創刊号の巻頭言といたします。

(平成9年2月15日)